

基研シンポジウム
「基礎物理学研究所の将来と物理学」

1979年11月9日

基礎物理学研究所

目 次

はじめに	139
開会のあいさつ 佐藤文隆	141
追悼講演	
「朝永先生と基礎物理学研究所」 小林稔	142
「くりこみ理論の回顧と展望」 宮本米二	148
I 基研における物理学	
佐藤文隆	158
森 肇	160
丸森寿夫	163
吉川圭二	173
討 論	
II 体制と運営	
問題提起 牧 二郎	183
コメント 1. 岩崎洋一	185
2. 大槻昭一郎	188
3. 渡部三雄	190
4. 山口嘉夫	191
討 論	197

はじめに

1979年11月9日 基礎物理学研究所において、基研シンポジウム「基礎物理学研究所の将来と物理学」が開かれました。ここに掲載しますのは、そこで行われた講演と討論の記録であります。

基研は一昨年設立25周年を迎えました。この四半世紀余の間に基研がわが国の物理学に与えた影響は極めて大きいと言えるでしょう。

はじめに

素粒子論の分野においては、その研究の発展はこの研究所を抜きにしては語ることができないほどです。設立当時を回想しますと、若い学問であったこの分野では、当然のことながら素粒子論講座を持つ大学も極めて少なく、素粒子論の研究自身が大学制度からはみ出した存在でした。このような状況の下では、既製の専門分野の壁、旧来の大学制度の壁や身分関係の壁を超えたところで研究を進めてゆかなければならなかったのです。素粒子論グループはその中で結成されましたし、基研はまさにこのような動きに支えられて設立され、若い学問と若い研究者グループに場と実質を与えてくれるものでした。そして、その後の25年余の間に、素粒子論研究は豊かな成果と業績をあげ、一つの学問体系として大きく成長したのであります。

物性論の分野においても、基研を中心として共同研究が組織され、その中から多くの成果を生み出してきました。そうした研究活動を通して、大学制度の壁を超えた研究者グループの結成も促され、物性研究所設立の運動へと発展したのであります。生物物理学等いわゆる境界領域の研究の発展に基研の果たした役割もまた特筆すべきものがあります。

このように、基研を中心とする研究活動の中から成長していったものに、専門の壁にとらわれずに「基礎物理学」を追究する精神と、大学の枠や差別を取り除いて自由な研究を支える「共同利用」の精神と方式があります。暗中模索と試行錯誤によって育成されてきたこの精神と方式は、漸次他分野にも浸透し、わが国の学問研究に新風を吹き込んだのであります。

しかし、漠とした新しい目標であった基礎物理学の中から学問体系が成長するとともに、そこには分化と多様化の傾向が見えはじめております。また、大学院制度の定着などによって、多数の研究者が養成されて全国の大学に分布するようになりました。もはや、基礎物理学も大学制度からはみ出した存在と言うことはできません。四半世紀過ぎた今日、基研設立当時の状況を知らない世代もふえ、すべての事情が大きく変わってきております。このようなときに、基研の諸制度、運営方式を与えられたものとして無批判に継続して行くならば、制度運営方式自身が形骸化せざるを得ないし、また学問研究推進の迫力にも欠けて行くでしょう。このシンポジウムが企画された背景的な理由もそこにあります。

基礎物理学研究所をめぐる状況が25年前と大幅に変わったとはいえ、わが国の学術研究体制自身のもつ根本的な欠陥と歪みは改善されるどころか、場面によってはもっと大きくなろうとしています。基礎物理学研究所とその基本的精神が衰退することになれば、それは、わが国の学術研究そのものを、前進意欲のない固定化した学問と、大大学、それも個々の閉鎖的研究室を中心とした戦前型体制にひき戻すことになると言っても過言ではありません。この研究所が育ててきたよい習慣と方式は守りながら新しい状況の下でその基本的精神を一層発展させる方途を探るのが私達の仕事でしょう。シンポジウムを契機にして、各地の研究室で具体的討論が行なわれることを期待します。(1980年4月)

シンポジウム実行委員

鈴木敏男、長岡洋介、並木美喜雄、

牧二郎、益川敏英、三輪浩、山村正俊